特別講演

第7回通常総会特別講演

富山県の農業

富山県農林水産部長　栗　田　年　代

只今ご紹介にあずかりました栗田でございます。本日は農村医学研究会の第7回通常総会まことにおめでとうございます。

此の研究会はお医者様を始め保健に関係ある大勢の方々に依って多面的な角度から農村保健に就いてご研究を重ねられ、それ等の成果を基にご提案とご指導を賜わりまして私達農業関係を預っている者と致しまして常日頃からそのご熱心な研究態度と其の成果に対し心から敬意を表している次第でございます。農村に生活している私共の仲間が保健衛生の立場からも安心して生活出来るのも、皆様方のたゆまざる研究のたまものであると、お礼申し上げる次第でございます。

今日の研究会の「農村」というものに就きましては農村医学研究会誌の綜説で豊田先生が此の問題に手を染められた30年前と現在を対比し非常に変って来た事を踏まえて、先生の卓越したご見解が出されているのを拝見致しまして感銘している訳でございます。

今申し上げました様に、農村というものが変りつつある、亦我々の目から見ると物凄く変ってしまった、という感じが強いのであります。従って保健、衛生の面でも色々難かしい問題が新しく起って来るのではないかと、考えるのであります。いずれに致しましても農村は生産の場であると同時に生活の場であることを確信しておりますし、　生活の一番基礎にあるものは「健康」であると思っております。農業生産がスムーズに行われる為には健康な生活が土台にあってこそ、と云える訳で此の様な点からも研究会のご活動に対し今後共よろしくお願い申しあげます。

さて演題は「富山県の農業」ということになっておりますが、富山県の農業を考える前提と申しますか、農業自体について色んな考え方があると思います。それを私なりに若干の整理をしながら問題を提起致し度い、亦富山の農業を考える上で此の様な点に留意した方が良いのでないか、ということも含めてお話し

申し上げ度いと思います。軽い気持でお聴き願い度いと存じます。

農業、とひと口に申しましても非常に広範多岐にわたる問題を含んでいることはご承知の通りであります。

日常私達が食べている洋菜類の中に白菜、キャベツ、パセリ、アスパラガス等最近の洋菜類というのが我々の生活と密接な関係を持っております。私或る事から白菜、キャベツ、パセリの三つが何時頃日本に入って来たのか調べたことがありました。元々日本に無かったこの三つのうち、どれが一番先、日本に来たのかお考え願い度いと思うのであります。普通日本の朝食といえば、ご飯にお味噌汁に納豆か卵でもつけ白菜の漬け物が出される。おふくろと白菜の漬物は大昔から在るみたいな気がしておりますが、三つの野菜の中で白菜が一番新しいのです。パセリは文献によりますと元禄時代に日本に来ております。キャベツはこれも記録によりますと安政年間、いわゆる安政大獄のあった1854年から56年に日本に入っております。此の辺りで「結球」というものが日本に入っております。キャベツは薬牡丹の類でありますが江戸時代に観賞用として入って来ているのですが、安政年間に食用として入って来た記録があります。処が大昔から喰べていた様に思っていた白菜が明治８年に初めて日本に入って来た記録があります。それは東京の博物館に当時の清国から（今の中国）山東白菜が三株届いたという記録が残されております。それ以後明治18年に愛知県で初めて栽培されその人の名前も残っております。一般庶民が食べ始めたのは日露戦争あたりからと云うことであります。日露戦争後宮城県で非常に栽培が盛んになり大量生産が可能になり多くの人々の食膳に上るようになった訳であります。恐らく日清、日露戦争あたりが白菜栽培の日本に拡がった時期であり、一般に食べられる様になったのは大正の末期の様です。大正12年に東京と横浜の市場に出荷されたという記録が残っております。

此の様な事を何故申し上げるか、と申しますと、我々の身近では之はもう常識なんだ、と云う事が案外我々の思いと違っている事があるのではないか、それが農業の場合でも云えるのではないか、と思うからであります。

農業を見直す場合、案外と思うような基本的な事から考える必要があるのではないか、そういう意味で私自身の経験が、白菜、キャベツ、パセリの事で案外だったなあ、と云う気がするのでご紹介申し上げた訳であります。

次に農業を考える前に「食糧問題」ということに触れてみたいと思います。

現在、我々は非常に食糧に恵まれているかの如き状態にあります。かの如きと申しますのは日本国中、例えば富山県に於いてもマーケット、デパートなどの食糧品売場へ行って銭さえ出せば世界の農産物が目の前にあって買える、という状態であります。こういう事は本当にホントウなんだろうか、という事をもう一度考え直す必要があるのではないか、と思うのであります。私も食べ度い盛りの年頃が物凄い食糧難の時代で空腹を抱かえ痩せ細って東京の真ん中を歩いていたものですが、そういう自分の一寸した経験からしても、30年の月日を振りかえって餓死者が出たともいわれるあの頃と現在の世の中をみますと夢を見ているのではないか、という気が致します。

最近、世界的な異常気象ということで専門家の色々な論文を読んでみますと、地球全体が寒冷化の方向に進んでいる。といわれております。以前気象庁に居られました松本順吉氏は「小氷河期が来るのだ」と云っておられます。異常気象という言葉が新聞にも時々載っており、昨日も「異常気象と食糧危機」ということが出ておりました。今春以来の天候だけを思い合せてみましても其の変化は皆様もお気付きだと思います。食糧の生産、という事に対し気象条件が悪くなって行く時期に突入した、という意見は略々一致している様

であります。一方、人口が爆発的に増える、といわれてもおります。現在世界の人口は37億～38億ともいわれ、計算する人に依り多少の違いはありますが、30数年後に２倍の人口になる。或いは2000年は倍の76億になるとか、色んな計算がなされております。そうなると人口の増加、という事と食糧の増加、という事が見合うかどうか、其処へ異常気象がどう絡んで来るか、非常に問題が多い様に考えるのであります。農業問題、食糧問題を考える時はこれらのことを頭の中に置いておくべきではないかと思います。

或る本に依りますと、地球には「定員」が在る、ということです。之も計算の仕方に依り多少変るのですが４年程前「地球は満員」という本が出ております。それを少しご紹介致します。

先ずカロリーを幾らとるかに依って変って来ましょうが、ここでは2400～2500カロリーを標準にしております。世界の農耕地を14億5000万haと致しまして総べての作物をこみにしていわゆる平均反収(10ａ当り反収)を計算致しますと、大まかにいって1haで4.8人を養なう事ができると平均的にいわれております。これは農地で出来る作物は直接、全部食物で食べる、という前提であります。家畜の腹を通す、いわゆる畜産物にしますとそれだけオリジナルカロリーが減ることになります。それ以外に加工すれば亦減る、など様々な減り方がありますが、直接食べる、として地球の定員は70億となります。今のテンポで人員が増加して行ったならば、という仮定いたしますと、今世紀末には地球は一杯になってこれ以上は入れません。生きて行かれません。という状態になる訳です。然し此の計算は非常に乱暴な計算です。食べる以外にも人間は衣服を纏はなくてはなりません。植物、動物、石油を原料にしたもの等ありますが、矢張り人間生活は木綿も着たい、絹も着たい、毛織物も、などと云うことで其の為の農用地も必要であるし、果物も食べたりと云うことを考えますと1ha4.8人養える計算は成り立ちません。約２割減ってしまう訳であります。そうすると70億人の２割減が定員と云うことになります。亦、他の計算を致しますと人間は穀物や野菜だけでは満足出来ない、ということです。肉や卵など動物性蛋白も必要であるし兎に角、色んな物を喰べたい、人、穀物、家畜へ行って、又人間と迂回生産をしなければならない、そうすると作物から直接とるよりも７～８倍ものカロリーが必要になります。

日本人の平均カロリーは2480カロリーで計算しておりますがオリジナルカロリーでは、約4000カロリーになります。アメリカ人は約3200カロリーで、オリジナルカロリーは約11,000位ですが、統計のとり方によって多少の差はあると思います。

今、おなかを空かせている民族がおります。なかには殆んど食べていないという場合もあると思いますが平均2000カロリーと致しますと、オリジナルカロリーが約2400カロリーになります。肉類など殆んど食べていないと言っても過言ではありませんので、アメリカ人の$\frac{1}{5}$位になります。そういう前提で之を逆に計算してみますと世界の平均反収で印度人並みの生活をしたと仮定して約70億人、日本人並みでは42億人、米国人並みでは15億人になります。米国人並みに生活しようとする時は現在の人口でも多過ぎる訳で37億人のうち２人に１人は生きていけない計算もある、ということであります。しかし、それではもっと反収を上げれば良いのではないか、と考えます。

日本の耕地単位面積当りの収量は高い方でありましてそれを基に計算すると、印度人並みでは210億人、日本人並みでは126億人、アメリカ人並みでは46億人、アメリカ人並みに生活水準を上げたとしましても未だ10億人は人口が増えても良い、という事になります。此の様な計算は前提条件をどこに置くかに依って変って来ますので数字については一々数

字について神経質になるのは適当でないかと思いますが、色んな計算をしてみますと食糧という物は随分問題があるんだ、というイメージが湧いて来るのは致し方ありません。

日本の農業を考える場合基本的に耕地が少ない、ということを考えなければなりません。統計によりますと国際的に比較した１人当り農用地面積は約 7ａで之は耕地採草地放牧地を全部含んだものであります。一番多いのはカナダで314ａ、印度は33ａあります。人口問題、食糧問題で大変な印度は農用地だけは広いのです。イタリアは41ａあります。日本の６倍、イタリア南部は稲作の非常に盛んな処です。比較的少ないのはオランダで 180ａあります。此の様に世界の先進国といわれている処と比べてみましても日本は極端に少ないのです。之は農業問題を考える時、根底の問題として捉えなくてはならないと思います。

非常に少ない農用地で我々は生活しているものですから輸入食糧が多くなるのは致し方のない処です。

主な輸入農産物に目を向けてみますと72年の統計では小麦が515万ｔ、大麦・裸麦が100万ｔ、トウモロコシ605万ｔ、大豆360万ｔ、マイロ325万ｔ、バナナ106万ｔも輸入しております。これらの数字を国際流通量に占める比率で考えてみますと小麦は80％、トウモロコシは全世界の流通量の２割に当る分を日本が買い、マイロに至っては世界の流通量の６割も家畜の餌として輸入しています。大豆は27％、バナナ20％であります。その結果、日本に行けば何でもある。あれだけ豊富にどこへ行っても食べ物でない物はないということになりました。515万ｔという小麦の量についても一度基準から考えてみますと、全日本の米の生産量は 1,190万ｔであります。日本国でとれる米の量の約半分程の量の小麦を外国から買っていることになります。それでは其の年に全日本で穫れた小麦は僅か11万4,000ｔしか穫れておりません。此の様な比較の仕方があるのですが、今、申しました様な穀物を仮に日本国内で生産したとしたらどれ位の面積が必要かと計算してみますと、主な穀物だけで1,117万haの面積が必要になります。これは現在の日本の全耕地面積の約２倍であります。ですから我々が生活している事は日本列島と同じ耕地面積が何処かにあって其処に作られた物を全部日本に持って来ている。それと日本の農民が作った収穫を併せて１億余りの日本人が非常に豊かな生活をしている、ということになります。何処から持って来るか、之亦計算してみますと、例え話として申し上げますとアメリカのメキシコ湾から運んだと仮定致しますと、２万ｔ級の貨物船 160隻で常時ピストン輸送をしている、という量に当る訳です。メキシコ湾と日本の間を年中往復している中で、いわゆる海運界の常識からいって荷揚げなどの日数を考えると、20隻程の食糧を積んだ船が毎日日本のどこかの港で世界の各地から集めて来た穀物を荷揚げしている、という計算が成り立つ訳です。いずれにしましても非常に膨大な量を輸入して外貨を払っている現実であります。若しも輸入が止まったらどうなるか、殆んど影響を受けないものは米と薯類だけであろう、という計算もありますが、輸入ストップの影響は、非常に大きいわけです。

次に、食料という物は単に口に入って生活するカロリー源というだけでなく、もう一つの観点は今や食糧は戦略物資である、と云う事を私は強調し度いのであります。世界的には、何処かの小競り合い程度で大戦争は起りませんけれども、既に食糧は戦略物資として国際的に一種の武器の様に扱われている事は新聞、其の他で皆様もご承知の事と思います。国際間で外交、或いは戦争の出来ない替りに食糧を武器として扱う傾向は将来も段々激しくなるだろう事は確かであります。その中で日本の農業をどう見てゆくか、という事が政治の問題になる訳であります。

日本の農業を考える前に私は農業の本質と言うことわどういう事なのか、もう一度考え直してみる必要があるのではないか、と思うのであります。

農業の本質、と云っても色々な見方がありましょうが、私は本質的には土地を利用する、という事を中心にして、自然環境を活用し、動植物の生命過程を利用し、人間生活にかかす事の出来ない物を作る、というのが本質と考えております。

昔の言葉に「成利波比」と書いて「なりわい」という語がありました。最近の国語では「生きるわざ」「生業」と書きますが、之を調べてみますと「生命の育成」と云う意味らしいのです。其の後「なりわい」は能力である、という言葉がありますが本来は「生命の育成」であります。

農業は本来生命の育成であります。あく迄も本来的な意味でありますが、現在農業は色色な機械を使用し、化学物質の助けを貸り、圃場整備、灌漑排水整備など、いわゆる近代化によって便利な農業が出来る様になりました。それを否定するものではありませんが、本来的には生命の育成という生活であろうという事で申し上げた次第であります。要するに太陽エネルギーと、土地の生産力、豊かな水を上手に利用して植物、動物、人間が永遠に生息するという循環の論理が成立しなければならぬ、という風に考えております。それと同時に農業自体、其の国、或いは県、もっと細かく入善の農業と永見の農業は差があっても良いのではないか、とも云える訳でございます。

その地域の自然条件と発展の過程、どの様な歴史を辿って現在になったか、集落、又は部落の形成の在り方、そして其処に育った農民の意識の問題があります。そこに生まれ、どういう思いで生活しているのか、複合経営のあり方、等々其の地域に関わり合いのある色々な条件が絡み合った上に形成され、生活しているのが農業であり、工業との違いが一番はっきりしている点であります。工業であれば原料から生産工程まで設計された建物があれば富山で作ろうがアメリカで作ろうが望んだ物が作れるのでありますが、農業では同じ水稲でも印度の稲を日本に持って来て植えても実らないし、又その逆の事が云える訳であります。砺波のチューリップをブラジルに持って行き、富山のチューリップでブラジルの人達の生活を豊かにしようという計画で球根を持って行ったら、全々、花が咲かないし、同じ球根でも腐るのです。向うで花を咲かすにはどうしたら良いか、色々研究して処理をして、漸く開花を見ることが出来ました。その様に同じ植物でも処を変えたら育たない、というのが農業の本質に関わる問題であります。

此の様に農業は本質的にはナチュラルなものであると私は限定いたしております。又、国民、或いは其の地域に密着したものである、という風に思っております。

一番動かないものは「土」であります。其の土に依存する農業を色々な面から考えて見ようと思っていました処「土と文明」という本を読みました。外国人の書いた其の本には色々興味深い事が載っておりましたので少しご紹介致します。

文明というものは或る時期に隆盛期を迎え、亦衰退期を迎える、という事が行われているのですが、ギリシャ文明を始めとして幾つかの文明を辿って此の研究者は土というものと、土の生産力というもののかかわり合いからみて行った訳です。

文明が興ると大体その繁栄が30～70世代で、年限で云いますと1,000～2,000年となりますが、その様な単位で以って衰退したり盛んになったりしております。ギリシャ文明の場合30～40世代で没落しております。我々が教わった歴史では都市国家間の嫉みや闘争、或いは経済的政治的な腐敗という事がギリシャを衰

退に導いた原因である、という事でありました。処が之は一般的な見解で真の根本的な原因は何か、それは自然の生態系を破端させたのだ．要するに土地の生産力を消耗して終ったのだ。と云う説を出しております。これは学界で認められているかどうか、私は調べていませんが、新しいいい方であると思っている訳であります。ギリシャが文明を興した時期は農業に依存し、其処から出発したのですが、文化国家、資源消費の都市、という人工的な生産をしてゆく方向に進まざるを得ないことになります。人工生態系が繁栄し、そこで色んな物を作りましたが紀元前 800年頃には人口が非常に増えてしまった、此の人口の増えた、どうする、という決定的な問題が出始めたのであります。ギリシャ人は其の武力を以って植民地を作り過剰人口問題を解決しようとしましたが、それと同時に基本的な食糧である穀物をエジプト、シリアなど附近の植民地で作り殆んど其処から持って来ました。一方本国の農民としたら需要と供給の少ない然も都市国家という事で農耕地を随分潰して、土地の生産力が非常に衰退してしまった。というのであります。それ等を立証したのでありますが、要するに「土地を大切にしなかった」と言うことに尽きる様であります。

此の著者はエジプトの他、ナイル川の文明、ローマ、中国等、世界の文明の盛衰の過程を「土」との関連の中で捉えて立証しております。そうなりますと土という物は農業だけではなく、そこに生活する人間の運命に関わる問題ではないか、と考えるのであります。

この様な事で農民という者は非常に本質的なものを持っている。本質から色々な問題も出て来ますし、又、本質的なものだから総て昔に返れ、と云うのではなく、今日まで人類が築いて来た20世紀の文明の中に在って、これから、どうするか、と言う事を考え直さねばならぬと思います。

そこで、現代社会の中で此の本質的な農業というのはどの様な位置づけ、或いは役割について考えてみたいと思います。

第一に農業、農村の主要性は国民食糧の供給者である、ということです。先程申しました様に世界的な情勢と多面的な関係を持っていることであります。

第二に、農業とか農村というのは社会の安定要素である、と考えております。例えば富山県だけを例に考えてみましても県民 107万のうち農業人口約36万5,000人でありますから$\frac{1}{3}$以上が農村に住んでいて農業に関わり合いを持っている事になります。全国では1億人のうち農家人口約 2,500万でありますから全国民の$\frac{1}{4}$に相当致します。富山県$\frac{1}{3}$以上、全国民$\frac{1}{4}$以上の人々が農村、或いは農業と非常な関わり合いを持って生活している訳です。一方現代の社会は、いわゆる管理社会とか或いは、何々社会とか言われている様に、ストレスが溜まる世の中です。そういう緊張を和らげるという意味で農村の果す役割は大きいものがあると思います。

第三番目と致しまして、我々人間が生きて行く為の環境を保全する、という役割を持っております。若し富山に水田が無かったら、と仮定して大雨が降ったらどうなるかと考えてみますと直ちに大洪水になる、という計算もあります。水資源を涵養するという事は、農地があり、林地があり、という事で涵養の機能があると計算されております。

農業の環境の浄化作用、即ち酸素供給量は幾ら、と計算されているのはご承知の通りであります。此処では色んな汚染を緩和する機能、そういう性質も持っております。地域的には気候の緩和作用、昔から農林地帯に入れば夏でも涼しくなる、といった様に都会に比べて地域的な気象を緩和することは、良く経験されることであります。

要するに農業の役割と云うのは非常に多面的で，人間の存在の根元に関わる、と云っても過言ではありません。此の様な農業という

ものに対して問題点が多く有るのですが、富山県の農業を考える時、以上の様な事を頭に置いた上で我々の農業というものを見てゆき度いと思います。

富山県の農業の特色は御承知の様に、水田が大部分である、稲作県である、という事であります。耕作面積が70,800haで水田面積は7万余りで、全耕地面積の95%が水田であります。全国平均は57.2%でありますから水田率は全国第一位ということになります。農業粗生産額は、49年で約 979億でありますが、そのうち米の占める割合が705億円、72%であり、水田面積から考えて当然かも知れませんが、国内第一位であります。

第四番目の特徴と致しまして、兼業化が非常に進んでいること、これは東北で見られる出稼という型が少なく大部分が安定した通勤型であることはご承知の通りであります。兼業農家率の全国平均は87.4%でありますが、当県では97%以上でありこれも全国第一位であります。一戸当り農家所得では49年の数字で全国平均287万6,800円で富山県は343万5,500円で、第9位ですから比較的高いと言えるかと思います。此の様に稲作が中心でありますが、10a当りの労働時間は全国平均92.5時間ですが、富山県は48時間程であります。これも非常に特徴的で、その内容を見ますと機械化が非常に進んでいるということかと思います。しかしこの様な事態は果して喜ぶべき事であろうか、ただ特徴的ではある、という風にいえると思います。

畜産は全国的に見ましても余り高いとはいえないかと思いますが、一戸当りに計算致しますと鶏は一軒のうちで飼っている数で比較すると全国等二位となります。一戸当り1,205羽程であります。豚は一戸当り68.9頭で全国第五位、肉牛の10.8頭で全国第五位、乳牛は12.5頭で全国第九位となります。此の順位は年により変動がありますが、大体富山県の位置付けは以上の状態であります。

農産物、畜産物の県内に於ける生産量と県民の消費量はどうか、自給率を計算致してみますと、米は全県民が一生懸命に喰べても其の倍の量、200%以上という数字が出ております。野菜は60%弱、これは市場流通量と多少異なりますから誤解のない様にお願い致します。果実は約15%、卵 160%で県外に出しているし、鶏肉は 110%ですからこれも少しは県外に出しています。牛肉80%、豚肉83%、牛乳73%となっております。物によっては県民の胃袋を満たしている物もありますが、果物、畜産物、殊に野菜は年間60%でありますが、冬期で降雪の時は10%位になってしまいます。此の様な点が即ち特徴という事でありまして、此の中に色々な問題点が含まれておるのであります。私共県庁で色んな農業関係の事業を行っている訳ですが県庁だけが幾ら逆立ちしても出来る訳はありません。農家の方々を始め、関係団体や皆様方の様な研究会や色んな方々と手を取り合って進まなければ成果は得られないし、又農業関係の成果というのは永続性があること、定着性があること、これが非常に必要ではないか、としみじみ味わっているのであります。

次に農業関係の事業をどういうふうに考えて行なっているか、という事に若干触れてみたいと思います。

農業というのは人間生活の基であると信じているのでありまして、先程から色々申し上げました結論であります。その中で富山県は米を中心と致しました食糧の基地としての性格を持っている、と考えております。その前提で県農業の基本的な方向として、我が国に於ける優良米の供給基地としての位置づけをしっかり確保してゆき度い、同時に畜産物、野菜、果物などの自給率の低いものは自給力の向上を目指して努力し、県民の食膳を賑わし度いと願っております。

自給力の向上に依り良質で豊富な農産物を安定的に供給するという基本的な方針を樹て

ている訳であります。

51年度は高度成長の歪みを相当受けております。年々進む農村社会の混合化、兼業化の問題、労働力の老令化と婦女子化の問題、富山県農業は約7割が女性の労働で支えられていることが統計的にはっきり示されております。又、農家の後つぎの問題、これは結婚のことも含めて切実な問題であります。

水稲に片寄っている農業は或る面では良い処もありますが、農業全体を考える時に、これで良いのだろうか、と思うのでありまして、その点も考えている訳であります。本県は、土地と、水と、県民の勤勉性に恵まれております。勤勉性は生産を支える基本的な条件であります。この様なものを総合して、社会的、経済的な条件を整えてゆく、ということを進めたいと思っております。生産の安定的拡大と経営の安定、此の二つを求めて51年度は努力致しております。

そこで6つの「作る運動」というキャッチフレーズを設け51年度の目標と致しております。一番目、豊かな土地を作ること。二番目、明日へのむらを作ること。三番目、優れた担い手を作ること。四番目、旺んな意欲を作ること。五番目、楽しい食膳を作ること。六番目、海と河との幸を作ること。以上の6つでありますが、皆様のご協力を得ながら前進して参り度いと願っている次第であります。

先程から雑談も含め、色々な事を申し上げましたが要するに農業問題とは、食糧問題に置き換えても良いかと思います。食糧問題に置き換えて考えてみますと之は県民全体の問題であって、単に農家のみの問題である、という認識は間違っている、と私は強く申し上げ度いのであります。県民全体で考えていただき度いと心から願っておりますが、その中で、農業というものは国や県の支持政策というものが必要であるとも思っております。本質に絡んで来た話しでありますが、経済的な面から見ましても支持的な政策なり施策が必要であります。それは、はっきり申しまして、県の場合は県民の税金を使って頂く、という事になる訳であります。

それには先ず県民のコンセンサスが必要であり、其のコンセンサスの元に協力を得て支持をして頂く、其のメリットは非常に広いメリットでありまして、単に米が安いとか、何かが沢山穫れたとかでなく、生活全体に関わるメリットが必ず県民の皆様にお返えし出来ると思っております。

農業保護とか過剰保護とかの言葉がよく使われますが、私は保護ではなく支持をして頂き度い、という事を申し上げます。此の席をおかりしてＰＲの様になって恐縮でありますが、富山県の農業が健全に発展してゆくことの為に皆様のご協力を是非お願い致し度いのでございます。

農業と云うのは永続性が大切という事も申し上げましたし、土地につきましては、私は、祖先から受けついだ土地をここで消耗し尽してしまって子孫に渡すのか、ということを農民に訴えた訳でございます。我々の世代において此の土地に何かをプラスして子供や孫に渡そうではありませんか。それは地力を増強して生産力の確かな立派な土地を次の世代に送ることであります。いつも農家の方に申し上げているのは此の事であります。食糧を供給する事は勿論大切な事ではありますが、もっと基本的な大きな問題はこのことであります。

皆様の研究会、これは生命を守る、ということで然も農村という地域社会で大地に足をしっかり着けた一つの運動であると私は理解しております。農村の保健衛生という生活と生産の基本の問題について、今後益々研究を深められ、その成果が農村で充分実りますよう心からお祈り致します。

最後に有名なソクラテスの言葉を以って、私の話を終えたいと思います。

「あらゆる必要の中で、最初のそして最も大

なるものは、生存と生命のための食糧供給である。

ソクラテスは大昔の人でありますが、この言葉は今の時代でもそのまま通用する言葉であります。

長い間ご静聴有りがとうございました。

演者略歴

現　職：農林省農林水産技術会議事務局
研究管理官

（略　歴）

昭和29年３月	東北大学農学部卒業
昭和29年４月	農林省入省 （九州農業試験場、農蚕園芸局植物防疫課、農林水産技術会議事務局連絡調整課などに勤務）
昭和49年４月	富山県農業水産部次長
昭和50年８月	富山県農業水産部部長
昭和52年４月	農林省農林水産技術会議事務局研究管理官